年末年始の伝統行事

市内各地には、その地域に古くから伝えられている伝統行事や、神社で奉納されるその地域独特の舞いや神楽などがあります。今月号では、その中から12月から1月にかけて行われた行事をいくつか紹介します。

①

③

②

④

【木太刀の舞い・写真①】

御厨町寺ノ尾地区にある八幡神社（森川典幸宮司）で12月15日、木太刀の舞が奉納されました。

この舞は、同神社の例大祭のときに奉納される神楽の一つ。木製の太刀を担ぎ鈴を片手に舞う神楽で、江戸時代からの伝統行事です。太刀が大きいほど翌年は豊作になるという言い伝えがあります。

氏子の田中祐毅さんが、近くからイタビの木を切り出し、約3時間かけて、長さ約1・2メートル、重さ約25キロの木太刀を製作。今福神社の早田伸次禰宜が太刀を担ぎ、笛と太鼓に合わせて舞を奉納し、集まった地区住民約20人が来年の地区の安全と五穀豊穣を祈願しました。

【佐々木祭・写真②】

12月24日、志佐町池成地区に300年以上前から伝わっている「佐々木祭」が行われました。

池成地区には、平戸藩士でこの地域を治めていた「佐々木様」が、参勤交代で留守中に妻の不義の噂を耳にし、大酒を飲むようになり亡くなったという故事が残っています。

今では「佐々木祭」として、佐々木様に仕えていた家臣の子孫にあたる同地区の5世帯が、命日といわれるこの日に持ち回りで毎年開催しています。

この日、地区にある佐々木様の墓参りをした後、当番に当たる田中純一さん宅に5世帯から約10人が集まりました。直径40センチ、重さ3・3キロの大杯に注いだ酒1升を3度回し飲みで飲み干すと、「よかった、よかった、家庭円満、夫婦円満」と笑顔がこぼれていました。

【鬼火たき・写真③】

毎年恒例の鬼火たきが1月7日、市内各地で行われました。

鬼火たきは、しめ縄や門松に火を放ち、1年間の無病息災や家内安全などを祈願するものです。

調川町松山田地区では、久保川志丸さん（60）が昨年11月下旬に、新わら約300束、竹約150本を使い、高さ約6・5メートル、幅5メートルの四角すいのジャンボ鬼小屋を製作。年末年始にかけて、地域住民などが集まって鬼小屋の中で焚き火をしたり、お酒を酌み交わしたりして親睦を深めました。

1月7日には、地域住民など約70人が集まり、持ち寄った門松などを鬼小屋の中に入れ、久保川さんが火を放つと鬼小屋は、勢いよく燃え上がりました。

鬼火たきの残り火で焼いたもちを食べると1年間健康で過ごせるという言い伝えもあり、参加者の中には持参したもちを焼く姿も見られました。

【もぐら打ち・写真④⑤⑥】

無病息災などを祈願する「もぐら打ち」が1月初旬、市内各地で行われました。

星鹿地区では1月6日、小中学生16人が集まり、地区内の約130戸を2班に分けて回りました。

子どもたちは玄関先で「祝いましょう　祝いましょう　祝いのもちをくれたなら　末も繁盛で世もよかろ…」と大きな掛け声を掛けながら、新わらで作った長さ約80㌢の「もぐら打ち棒」で玄関の床をたたきました。

御厨地区では、御厨長生会（松瀬輝治、吉永和人会長）が1月14日、地域の伝統を子どもたちに伝えようと御厨保育所、御厨小学校、慈光幼稚園でもぐら打ちを実施しました。

志佐地区では上志佐保育所（辻久敏所長）が1月15日、地域、保護者、保育所の交流促進・連携強化・子育て支援と異国間交流などを目的に、保護者や地域の人、ＡＬＴ（外国語指導助手）を招いてもぐら打ちやもちつきをして交流を深めました。

【百手講・写真⑦】

志佐町庄野地区の王嶋神社で1月8日、百手講が行われました。

この行事は、的に当たった矢の数で今年の豊凶を占うもので、市の無形民俗文化財に指定されています。

今年は、武尾和彦さん（40）と洸平さん（17）親子が射手を務め、和彦さんの父和幸さんが太鼓を鳴らしました。親子3代そろって行われるのは初めてとのこと。烏帽子に狩衣姿の2人が約10㍍離れた場所から直径約50㌢の的めがけて約50本の矢を放ちました。地区の住民が見守る中、7本の矢が命中し、1本は的を支える竹に刺さりました。

中川明宏宮司は「過去の本数からすると当たっているので大豊作になるのでは。支柱の竹にも刺さったので思わぬところから幸運が舞い込むこともあるでしょう」と話していました。

【大般若・写真⑧】

大般若の経典が入った箱の下をくぐって1年間の無病息災を祈願する「大般若」が1月10日と11日、志佐町の8地区と福島町の5地区で行われました。

江戸時代、この地方に疫病が流行したとき、大般若経を祈とうして回ったところ疫病が治まったことが始まりとされています。

志佐町里地区では11日、還暦と厄入りを迎える人などが重さ約10㌔の経典が入った箱を交代で担いで、地区内の約200戸を「だいはんにゃー」と掛け声を掛けながら回りました。

各家では、担ぎ手にお酒などを準備して出迎え、経箱の下をくぐって、1年間の無病息災を願いました。